

心のゆたかさをはぐくむ (最終回)

心のゆたかさを創りだす福祉

これまで、心の支援に視点をおいた様々な活動をご紹介しながら、福祉サービス利用者の生活や人生をいきいきと豊かにしていくために、サービス提供者に求められる姿勢について考えてきました。

最終回の今回は、日本福祉大学の竹下隆氏に、本連載を振り返りながら、今後の福祉サービスの展望や課題についてご寄稿いただきました。



竹下 隆 氏
日本福祉大学
経済学部
経営開発学科教授

心のゆたかさは生命のゆたかさ

「心のゆたかさをはぐくむ」という今回の連載のヘディングは、福祉があるべき目標の課題意識を見事に当てています。医療界でも、「生命のゆたかさをはぐくむ」が目標とされ、本格的に取り組まれるようになって十数年。「生命のゆたかさ」とは、その生命が営む「生活のゆたかさ」と同義であること、聖路加国際病院の日野原重明名誉院長も説いておられますが、この「生活のゆたかさ」は生活を営む人間の「心のゆたかさ」に通じるものであり、福祉の「心のゆたかさ」の追求は、医療が「生命のゆたかさ」を追求することと一致することになります。

もともとこの「心のゆたかさ」

は「物質のゆたかさ」に対する概念として登場したものです。産業革命以降の工業力で、現代人類社会は物質文明化を短期間にどんどん進めました。文明が進むほど豊かな生活を保障する社会ができると考えられて来たからです。しかし、物質のゆたかさは得たものの、大量生産や販売、消費、廃棄のほか、そのための大量エネルギー消費などの結果から公害、地球環境問題を抱え、また結果として、社会の東西南北のひずみの問題や、過当競争、犯罪の増加、貧富の差など連鎖的事態と考えられる難題に遭遇することとなりました。

楽で便利、贅沢な生活をすることを目標にした「モノのゆたかな生活」では、「ココロのゆたかな生活」は必ずしも得られないことを認識することになったのです。そこから「心のゆたかさをはぐくむ」つまり「心のゆたかな生活をはぐくむ」ことの追求が始まったのです。

基本的生活を弾ませるゆたかさ

「心のゆたかさをはぐくむ」のは「生活のゆたかさをはぐくむ」に通じることに、心をめぐる問題と、癒しの効果を考える④でのタイトルがその点をよく突いていることは勿論、「いきいきと豊かに生活するために」と見出し文にすばり指摘してあるのを、読者の皆さんにも読み直していただきたいところです。さらに「多摩調理師専門学校」⑦の介護食士養成や「こどもの森」⑧の食育の活動も、生活のゆたかさをはぐくむ基本的条件を訴えているよい例で、「食べる」という行為を触発する素材や調理方法の問題、さらに食習慣を子孫に伝えるという人間の任務など、幅広い事柄が伝えられています。「生きる可能性をかきたてる食」の問題に言及しているところは、医療の目標とする「生命のゆたかさ」追求にまで焦点を当て、医療と福祉の融合する課題意識を浮き彫りにしています。

五感の中に生まれるゆたかさ

人間の心は、心理学では目で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、舌で味わうなど、数々の外部情報を感覚器官と脳で受け止め、それらを記憶したり、学習したりする能力などを

積み重ねて次第に作り上げられ、複雑なものとなっていきます。本連載では、感覚器官に癒しの刺激を加えて、心のゆたかさを取り戻す事例を挙げています。「日本アロマケア学会」⑩のアロマセラピーや、「日本カラーネットワーク協会」⑨の色彩によるカウンセリング手法などは、ゆたかさを失いそうになった心の危険信号を知らせてくれる格好のものです。

また、「日本音楽療法学会」⑪の活動も同じです。特に音楽は、視覚や皮膚感覚に訴えるセラピーがクライエントの反応を途上で系統立てて分析、対応してゆく方式を採ることが多いのに比べ、始めから計画的、意図的に活用されるセラピー方式を示していました。人は発達する心をはぐくみ、病む心を癒しながら「ゆたかな心」を膨らませてゆくものなのです。

尊い生命を輝かせるゆたかさ

全ての生命はどれ一つとして同じものはありません。人もそれぞれ与えられるものが違ってこの世界に登場します。だからこそ、皆それぞれの「自分らしさ」を持って生活し、生命を燃やし尽くすこととなります。「日本ロイヤルライフセイビング協会」⑤のスキンカモフラージュや「糸の詩」⑥の着